

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006年度～2008年度
 課題番号：18530511
 研究課題名（和文） ピア・サポート及びソーシャルスキル教育の実践評価の相互メタ評価による検討
 研究課題名（英文） Mutual Meta-evaluation of Peer Support Practice and Social Skills Training
 研究代表者
 戸田 有一
 大阪教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：70243376

研究成果の概要：本研究では、ピア・サポート実践とソーシャルスキル教育実践をどのように評価すべきなのかを、研究者や実践者にインタビューを重ねることによって明らかにした。研究者が実践評価方法をお互いに検討しあい、評価モデルの3分類を得た。その3分類について実践者にインタビューを重ね、対照群の設定に関して最も見解が分かれることが示された。その問題の解決方策として、実践評価の相互対照群モデルを考案して提案した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	900,000	270,000	1170,000
年度			
年度			
総計	2500,000	480,000	2980,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：実践評価 ピア・サポート ソーシャルスキル 相互メタ評価

1. 研究開始当初の背景

本研究の研究代表者及び研究分担者は、いじめ防止等のためのピア・サポート実践等を小中学校に導入した経験をもち、その実践評価研究も科学研究費補助金による研究として行ってきた。また、ここ数年、本務校以外の大学院院生の、心理教育プログラムを実施して評価を行う調査研究の相談にも応じている。

それらの研究は、子どもたちの抱える諸問題への解決の一助となろうとする志のもとになされているのだが、「研究のための実践ではないか」との批判がなされることもある。

たとえば、ニーズの把握や実施の際のきめ細やかな対応、事後の評価とフィードバック

や補償実践が、必ずしも十分ではないことが指摘されることがある。そこで、実践評価研究のあり方の検討を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、心理学者や大学院で学んだ実践者などによって、学校で子どもたちに実施されるピア・サポート実践とソーシャルスキル教育の実践評価手法について、評価手法そのものを相互に評価（相互メタ評価）することにより、評価や実践のあり方を検討することである。

具体的には、下記の4つの評価手法について、実践評価者相互の評価（相互メタ評価）を行う。

- (1) ニーズ評価手法
(学校・児童生徒の側のプログラム導入希望やニーズを把握する手法)
- (2) プログラム導入の際のリスク評価手法
(導入前のインフォームド・コンセント等)
- (3) プログラムの効果評価手法
(評価の時点設定や評価尺度や実施方法)
- (4) プログラム実施後の対応評価手法
(フィードバックや補償実践)

この検討により、これらの心理教育プログラムを学校現場に導入しようとする際に、子どもたちに最大限の利益をもたらす、負担を最小限にするための実践的知見をまとめることができると考える。

研究1では、このうち(3)に焦点をあてて主に研究者へのインタビュー調査等を行った。研究2では(1)～(4)のすべてについて、実践者へのインタビュー調査等を行った。

3. 研究の方法

日本国内で、心理教育プログラムの実践及び評価を行っている研究者・実践者を訪問し、実践の見学及び聴き取り調査を行う。

研究1

(1) 資料収集

以前、「ピア・サポート実践の多様性調査」で調査を行った実践校について、実践報告や論文などから精査を行う。

(2) 国内の実践校の訪問

(1)で選んだ学校を訪問し、ニーズ評価、リスク評価、効果評価、対応評価に関する聴き取り調査を予備的に行う。評価者(実践者本人あるいは協力している独立した評価者)がその評価に関する暗黙知を十分に言語化していない場合もあると考えられるので、聴き取りを複数回行う。聴き取りの回を重ねた場合には、他の実践からの示唆も伝えるなどして、暗黙の実践知の明示化をうながす。

(3) 海外の実践者・研究者との検討

国際行動発達学会(2006年7月メルボルン)において、ピア・サポート実践評価に関する発表を行い、イタリアや英国の実践者・研究者と意見交換を行う。来日したH.コウイ教授と実践評価に関する検討会を行う。

(4) 実践にとって理想的と思われる評価手法の考案

調査を行うなかで、各実践者と議論を深め、今後の実践にとって理想的と思われる評価手法を考案する。

研究2

研究1の調査結果に基づき、多様な評価ポリシーや評価手法に関するモデルを作成する。そのモデルに基づいて質問項目を作成し、ピア・サポート実践やソーシャル・スキル教

育の運用経験者による相互メタ評価についての面接調査を行う。また、実践者の回答の特徴を明らかにするために、大学院院生などの実践運用未経験者などを対象に同じ質問項目で面接調査を行い、それぞれの知見を総合的に考察する。

(1) 質問項目の作成

研究1に基づき、質問項目を作成する。各実践の評価の方法や内容に関するモデルをもとに、それぞれの評価方法に関するメリットとデメリット、及びそのデメリットに対処する方法を尋ねる。ピア・サポート実践とソーシャル・スキル教育の双方に共通の質問項目とともに、各実践に固有の内容にかかわる質問項目も準備する。

(2) 面接調査の実施

実践者に、評価手法と内容に関するインタビューを行う。最適な評価方法に至るための観点を聞き取る。

(3) 研究結果の発表

ピア・サポート実践とソーシャル・スキル教育のそれぞれについて、まずは独立に評価方法と内容に関する評価の検討を行い、知見をまとめる。そのうえで、両実践での異同を論じ学会等で発表する。

4. 研究成果

研究の主な成果を、研究1と研究2に分けて記述する。

研究1

研究1については、下記のような成果を得ることができた。時期はすべて2006年度。

(1) 資料収集

①香川大学教育学部附属教育実践総合センター主催公開シンポジウムにて収集。

(香川大学11月)

②小教研養護部会自主研修会(鳥取 1月)

鳥取大学附属小中学校・金沢市立北鳴中学校からの報告にて収集。

(2) 実践校の訪問と調査実施

①児童と保護者の実践評価のズレに関する調査(鳥取での調査)を実施した。

②実践の効果に関するピア・サポーターからの聞き取り調査(鳥取と大阪での調査)。

(3) 諸外国の研究者・実践者からの聞取など

①国際行動発達学会(メルボルン 7月)に研究代表者・研究分担者ともに研究発表し聞取調査及び学校見学をした。

②日本学校教育相談学会・日本ピア・サポート学会共催『国際交流シンポジウム&ワークショップ・イン・東京』(東京 8月)「よりよい人間関係をつくるコミュニケーション技法」をヘレン・カウイ教授と担当。

③ダグマー・ストロマイヤ博士からの評価手法に関する聞き取りおよび意見交換(大阪教育大学 11月)。

(4) 実践にとって理想的と思われる評価手法

の考案

聴き取り調査の前提となる実践評価モデルの構築と検討を十分に行い、「時間比較モデル」「回顧比較モデル」「グループ比較モデル」という実践評価モデルの3類型を見出し、さらなる検討と精緻化を行った。

研究2

聴き取り調査は、関連学会のなかで集团的に討議する場を得ることができ、実践評価モデルの検討とともに、実践知の聴き取りができた。以下は、2007年度から2008年度にかけて行った。

(1) 質問項目の作成

質問項目の作成のために、実践評価モデルの構築と妥当性の検討（研究者及び実践者との意見交換）を行った。

- ①英国のサリー大学のヘレン・カウイ教授とともに、実践評価モデルを精緻化した。
- ②欧州発達心理学会にて、ポール・ネイラー博士、ディーター・ボルケ教授らと実践評価に関して議論した。
- ③東京大学、兵庫教育大学にて、実践評価モデルの検討をし、特に、統計技法に関連する助言を得た。

(2) 面接調査の実施

- ①日本ピア・サポート学会第6回総会にて、ピア・サポートの実践者や研究者と実践評価に関する議論を行った。
- ②岐阜大学で、大学院生の実践評価に関する意見を求め、繰り返し議論を行った。
- ③群馬県、大阪府、香川県などの実践者にインタビュー調査を繰り返し行った。

(3) 研究成果の発表

インタビュー調査の結果をまとめ、発表準備中である。

最後に、本研究から得られた成果の国内外における位置づけとインパクト及び今後の展望について述べる。

本研究の成果は、ピア・サポートの専門誌に招待論文（査読有）として掲載され、ピア・サポートに関する書籍の中でも引用された。

インタビュー調査の成果が国際学会において発表され、各国の研究者と議論する際の話題となった。現在仕上げの段階にある論文も、同様に発表していく予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

本研究に関する論文のみを挙げる。

〔雑誌論文〕（計 2件）

1. 戸田有一・宮前義和（2009）日本におけるピア・サポート実践の評価モデルの分類。ピア・サポート研究, 6, 1-9.（査読有）
2. 中尾亜紀・戸田有一・宮前義和（2008）日本の学校におけるピア・サポートの体系的な理解の試み 香川大学教育実践総合研究, 16, 169-179.（査読無）

〔学会発表〕（計 5件）（国外分のみ）

1. Toda, Y., & Kurihara, S. (2009) From a Q&A Handout method of peer support to a hierarchical on-line support system: A 10-year evaluation study. Symposium "Bullying, Children at Risk, Coping Styles, and the Impact of Anti-bullying Interventions in School" (organized by Naylor, P.) 14th European Conference on Developmental Psychology, Vilnius, Lithuania, 21st August.
2. Toda, Y., & Smith, P.K. (2008) Symposium: Teachers' attitude and knowledge concerning school bullying -implications from recent studies and applications to schools-. ISSBD, Würzburg, Germany, 15th July.
3. Toda, Y., & Sakane, K. (2008) The Influence of Teachers' Knowledge of and Attitudes about Bullying on their Prevention and Intervention Strategies. ISSBD, Würzburg, Germany. 15th July.
4. Miyamae, Y., Toda, Y., & Namima, A. (2006) Three dimensions to categorise peer support practice in Japan. the 19th ISSBD (International Society for the Study of Behavioural Development), Melbourne. 5th July.
5. Toda, Y. & Yoshida, H. (2006) The Evaluation of Peer Support Practice by Children and their Parents. ISSBD, 19th Biennial Meeting, Melbourne. 3rd July.

〔図書〕（計 3件）

1. 宮前義和（2009）行動療法で大切にしているいくつかのことから 藪添隆一・七條正典・山田俊介（編）『学校臨床心理学を考える』。美巧社 pp. 131-148.
2. 戸田有一 ダグマー・ストロマイヤ クリスチアーナ・スピール（2008）人をおいつめるいじめ—集団化と無力化のプ

ロセスー 谷口弘一・加藤司(編著)『対人関係のダークサイド』第9章. 北大路書房. pp117-131.

3. 戸田有一 (2007) ソーシャルサポート整備の実践としてのピア・サポート 水野治久・谷口弘一・福岡欣治・古宮昇(編)『カウンセリングとソーシャルサポート-つながり支えあう心理学-』第4章. ナカニシヤ出版. pp55-64.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸田 有一

大阪教育大学・教育学部・准教授

70243376

(2) 研究分担者

宮前 義和

香川大学・教育学部附属教育実践総合センター・准教授

40325329

(3) 連携研究者

なし